AACK 京都大学学士山岳会 No.56

Newsletter

March 2011

http://www.aack.or.jp

目次

ネパール登山隊報告　根岸哲生ほか……1
追悼　廣瀬幸治氏
エトさん・広瀬幸治君の思い出　中島道郎……9
廣瀬エトに贈る　藤田シャク……11
廣瀬幸治さんの思い出　井上　潤……12
ダッハスタインの絵　寺本　巖……12
廣瀬先輩の突然の死を悼む　平井一正……14
廣瀬さんとノシャック遠征隊　酒井敏明……15
追憶の廣瀬エトさん　左右田健次……17
嫌みな追悼文　岩坪五郎……19
OKYAN2010の報告（兵庫県西播磨 国見山・赤谷山の山行記録）　潮崎安弘……20
「ノシャック計画成立裏話―近江作の段」谷　泰〈ニュースレター五五号掲載〉をめぐる訂正とお詫び　谷　泰……22
日本山岳協会山岳共済会および山岳遭難・捜索保険の案内　事務局　吹田啓一郎……23
お知らせ……26
編集後記……26

ネパール登山隊報告

ネパール登山隊報告　根岸哲生

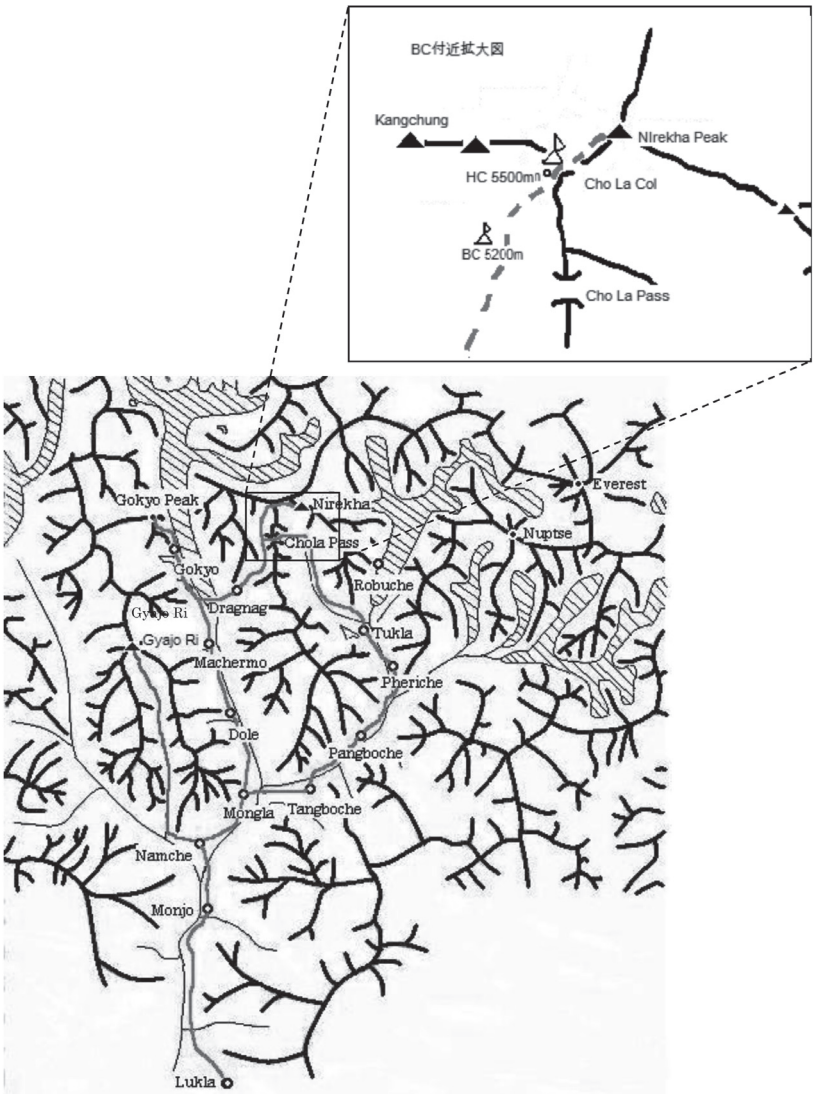
出発まで

ここ数年、山岳部は部員が増え、以前と比べて活動が活発になってきた。それと同時に、多くのOBの励ましもあり、「ヒマラヤを見てみたい、登ってみたい。」という機運が自然と部内で盛り上がった。そうした背景の中で、この登山隊は生まれた。この隊の目的は、山岳部で、山の選定から登頂までを含めてある程度自主的に登るということであった。ただ、この隊が目的にしている山は、未踏峰ではない。それについて隊の内外から多くの意見があった。しかし、一〇年近く山岳部にかかわってきた私は、山岳部の閉塞状況をどうにか打開したかったため、まずは登ることを考え、考慮に入れなかった。

実際の登山

ニレカは、当初簡単に登れると考えていた。結果として、隊員一名が体調を崩したため、三名の隊員が登頂した。ルートはロープを出した個所が四ピッチで、雪稜であったため、それほど難しさはない。登山期間は一〇日ほどとっていたため、十分であった。スタイルとしては極地法であり、HCに一度だけ荷揚げをし、後もう一度ルート工作を行い、最後にアタックという手順を踏んだ。結果として一次アタックは中止し、二次アタックで成功することになった。荷揚げは一人一五キロほどであった。

だいたいのところでは順調であったが、高所での体調管理には困った。まず、日本での山強さと高所での山強さが比例しないことで、計画の見通しが立てにくくなった。また、動けるのか動けないのかを判断する際に、経験がないため、SPO_2の数値に振り回されたことである。また、BCで体調が悪くなった際、本当に自分の体が回復するのか全くよめなかったため、次の行動の判断がなかなかつきかねた。また、個々の順応が異なる高所で、四人全員で行動する隊には、難しい面があった。その例が、全員下山した、一次アタック中止である。一次アタック中止の判断は、「翌日まで様子をみて、調子が悪ければテントキーパーをさせる。」か、「アタックする隊と下山する隊に分ける」という判断もありえた。今回は好天が持続したため、翌々日の再アタックで登頂ができた。し



クンブー地方　全体概念図

かし、もし悪天が続いた場合を考えると、登頂できなかった可能性もあり、全員下山はそれほどよい判断ではなかった。

ギャゾリに関しては、ロープを使って登る体勢まで整えられなかったが、核心部手前のコルまで行くことにした。コルでどんな登山をするはずだったのか、自分たちにできるものだったのか見てみたかったためである。見るのとやるのでは全く違うが、実際に見てみると、傾斜の急な雪稜と数か所の岩で、それほど難しくないように見え、手ごたえを感じられた。

登山を終えて

ヒマラヤは大きかった。酸素の薄さもあって、なかなかはかどらない歩みからみると、写真で見ているよりもはるかに大きく感じた。不確定要素の少ない山で、気楽に全員登頂だと思っていたが、暗中模索というのがふさわしい状況が続いた。仰ぎ見る山はより大きく、われわれの行為など興味がないようにみえた。息苦しさに目を覚ましてしまった際には、まるで山が私をのみ込んでしまうかのような恐怖心さえ覚えた。山は恐ろしい。翌日の天気も見えず、体調もわからず、ルートもなかなか見えなかった。

そうした中で、われわれにできることといえば、「この登山は終わりだ。」などといたずらに悲観に走らず、「明日は絶対晴れる。」「急に回復する。」などとも思いこまず、ただただ現状を受け入れて、耳を澄まして山の声を聞いて、できることを見極めながら精一杯登るしかなかった。そうした姿勢で、できることを増やしていくしかなかった。そうした山とのふれあいが、私にとっての山の楽しみなのだと再認識した。

かつて河口慧海がヒマラヤを越える際、ヒマラヤの山々を見て、あまりの神々しさについ詩を詠んだ。「駄作であろうが、この場所に来なければこんな詩はでなかった。」と書いていた。私は、今、そういう詩はでてこないが、「ここにこなければできない」ような、自然との出会いをしたい。そういう登山をこれからもしたい。

以下、今回の海外登山における時間記録を記す。

メンバー　田中　貴（Ⅲ）　藤竿和彦（Ⅲ）
荻原宏章（Ⅱ）　根岸哲生（ＯＢ）

対象　ネパールヒマラヤ　ニレカピーク（六一六九m）ギャゾリ（六一八六m）
期間　九月一四日より一〇月三一日まで

《トレッキング》

九月一四日
　先発隊（田中、藤竿）がカトマンズに到着する。
九月一五日　カトマンズ
　先発がカトマンズで買い物、葉書の宛名書きなどを行う。しかし、葉書は結局日本に届かなかった。
九月一六日　カトマンズ
　後発隊（荻原、根岸）がカトマンズに到着し、先発隊と合流する。夕食をエージェントのJPさんの家でいただく。
九月一七日　カトマンズ
　サーダーのキパさんとパッキングについて相談する。午後、JICAの関係でネパールで働いている須山OBとおち合う。
九月一八日　カトマンズ　ルクラ
　飛行機に乗って、ルクラまで。天候不順で出発が遅れる。ルクラ飛行場は、墜落事故が多く、ついこの間も墜落事故があったばかりなので、少し心配になる。ここで、ルクラにいたコックのタシと合流する。
九月一九日　パクディン
　荷物が届かないため、結局、われわれは先に進んでおく。
九月二〇日　ナムチェバザール
　ゆっくりと登ってナムチェバザールに到着。
九月二一日　ナムチェバザール
　高所順応のため、クムジュンに行き昼食を食べ、ナムチェに下山。夕方、荻原は熱が出て不調になる。
九月二二日　ナムチェバザール
　田中と根岸でターメに順応のため遊びに行く。荷物を持った隊がようやく来た。彼らはそのままBCに向かっていった。荻原の体調は回復しないため、もう一日滞在することにする。
九月二三日　ナムチェバザール
　町を見学してのんびりする。
九月二四日　ポルチェテンガ
　荻原の熱はある程度下がったので、出発。いままでシトシト降っていた雨は上がり、天気は急によくなった。ようやくヒマラヤらしい山々が見えてきた。自分が絵葉書の中の世界に入っているようである。ポルチェテンガは、川のそばの非常に落ち着いた場所であった。四〇〇〇m前後に長くいたので、非常に体調はよい。
九月二五日　ドレ
　ポルチェテンガから、カールの村ドレに向かう。荻原は結局体調がよくないので、タシと共にもう二泊ドレにいて、ゴーキョで合流することにする。無理して全員で行動してもどうしようもないのであるし、全員が登頂するまでに順応できていればよいのだと伝える。
　散歩していると、ヤク使いのおばさんに会う。今日ナムチェバザールを出発して、マチェルモまで行くという。われわれの三日コースを一日で歩いてしまうのには驚いた。
九月二六日　マチェルモ
　今日は荻原とコックのタシをドレにおいて、残りの三人で歩いていく。マチェルモには早く着いた。周囲はだんだん木が少なくなっていき、草しか生えない土地に来た。マチェルモもドレと同じようにカールの中にある村。午後からはガスのため、ギャゾリはうまく見えない。マチェルモでは、ロッジオーナーとどこで薪を調達しているのか、エベレストは人が多すぎて環境によくないとか、ギャゾリの登攀史などいろいろと話を聞く。ヤクの糞を集めて、丸く平らなお好み焼きのような形にして草地で乾かしていた。ヤクの糞を燃料にするという話は聞いてはいたが、こうした形にするとは知らなかった。夜にはBCに入っていたサーダーのキパとおち合う。
九月二七日　ゴーキョ
　ゴーキョへの道は、ゆるやかな地形の道である。チョオユーに吸い寄せられていくように歩いていき、ゴーキョへ。ゴーキョにはインターネットカフェや本屋まであってびっくりする。ゴーキョ周辺は、今までと違い、チョオユーやチョラツェなどが圧倒的な姿で見える。氷河も大きくて立派である。こうして世界の屋根を眺めていると、山にはそれぞれ独特な存在感があることに気づく。高さでも、初登頂でも、難易度でもなく、存在感のある山に登っていきたいと思う。山は存在感が大事だなと思う。
九月二八日　ゴーキョ

順応のため、ゴーキョピークに登る。ゴーキョピークは人気のある山で、山頂では多くの人で賑わっていた。エベレストを始めてみたが、確かに立派な山である。エベレストには人が多いとか、どうこうとかいろいろあるが、確かに登ってみたくなるのが少しわかった。日本にいると八〇〇〇ｍであるとか、高さで捉えるしかなくて、何がよいのか想像しにくいのであるが、やはり自分で見てみるといろいろよくわかる。

九月二九日　ゴーキョ

forth lake に散歩に行った後、荻原と久しぶりに合流する。荻原は完全に回復しており、よかった。明日は久しぶりにパーティ全員で行動することになる。

九月三〇日　タグナク

氷河を渡って、対岸のタグナクに向かう。氷河の上を歩くといっても、氷の上を歩くわけではなく、氷河の上に積もった土砂の上を歩くだけである。その氷河の上の土砂から花が咲いている。花が氷河の上という不安定な場所で咲いているので、なにか奇妙でおかしい。タグナクではBC野菜を少し分けてもらう。

《ニレカピーク登山》

一〇月一日　BC

BCへとゆっくりと上がっていく。BCではキッチンボーイと再会する。全員体調は良い。BCで荷物を分け、フィックスロープを切るなど装備の確認を行う。

一〇月二日　八：〇〇BC～一一：一五HC一三：〇〇～一五：三〇BC

ニレカ　ハイキャンプに向かって

BCからHCへ荷揚げを行う。いままでとは違い、急に体が動かなくなり、背中の荷物が恨めしくなるが、何とか進む。氷河上でロープを結び、一ピッチフィックスを張り、BCに下山する。BCでは、根岸と田中は体調が悪い。

一〇月三日　BC

レスト。昨日の疲れが残っていて、散歩をするもなかなか体が動かない。

一〇月四日　六：〇〇BC～九：〇〇HC～一二：三〇五九〇〇ｍ～一六：三〇BC

フィックス工作を行いにHCへあがり、六〇〇〇ｍの手前まで進み、雪稜に二ピッチほどフィックスを張り、帰る。あと一歩で頂上に着きそうであるが、日程通りBCに下山する。おおよそ登頂の見通しが立った。BCでは、田中の体調が悪くなり、食事をうけつけなかった。

一〇月五日　BC

レスト

一〇月六日　BC

レスト

一〇月七日　一二：三〇BC～一四：三〇HC一六三〇～BC～タグナク（根岸、田中）

午前中は、少し天気が悪い。軽く雪が降る。アタックのため、午後からHCに向かうが、テントに入った後、田中が不調を訴えたため、急遽BCに下山する。BCからは、念のため、

登頂写真

根岸と田中とコックのタシの三人でタグナクまで下りてしまうことにする。田中はもう一泊して、BCに帰ることにする。

一〇月八日　タグナク一一：〇〇～一二：三〇BC～一四：三〇HC、タグナク（田中）

根岸はタグナクよりBCに上がり、荻原、藤竿と合流し、サーダーのキパとともに再度アタックに出発。HCまで上がる。

一〇月九日　三：三〇HC～八：五〇ピーク九：三〇～一二：三〇HC一三：三〇～一六：〇〇BC

未明より、アタックに向かう。暗いうちにフィックスをたどり、ゆっくりと確実に進む。ロープはフィックスの上と、最後の稜線で出した。登ってみるとフィックス終了点からは近く、意外とあっさりと登れる。頂上ではエベレストがよく見え、気持ちのよい場所であった。ここまでくるのになんだかんだとだいぶ長い時間がかかった。下降ではスノーバーが重く、身にこたえたが、なんとかBCまで戻った。BCでは田中と合流。翌日、再アタックは田中の体調が戻らないとのことで、取りやめ。

一〇月一〇日　BC

藤竿、田中がHCを撤収する。

《下山トレッキング》

一〇月一一日　ポルチェ

BCで解散し、藤竿、荻原はエベレストBCへ、田中、根岸はギャゾリに向かうため、まっすぐナムチェに帰る。

一〇月一二日　ナムチェ

レスト

一〇月一三日　ナムチェ

買い出し。

一〇月一四日　ナムチェ

レスト。エベレストBCを訪れていた藤竿、荻原と合流する。

一〇月一五日　ナムチェ

出発するが、田中は精神的に疲れ切ってしまっていたので、途中でナムチェに全員で帰る。体勢をたてなおし、明日、根岸はギャゾリのコルまでを目標に再出発することにする。

藤竿、荻原、田中（帰国先発隊）は、ルクラに到着した。

ギャゾリ

《ギャゾリ登山》

一〇月一六日　ナムチェ八：三〇～一一：五〇メンデ

メンデのゴンパ（寺）まで進む。ここは、外人向けに宿泊のできるゴンパであった。一泊一五〇〇ルピーでやや割高であるが、数人のヨーロッパ人が泊まっていた。

帰国先発隊は、悪天のためルクラに泊まる。

一〇月一七日　メンデ八：〇〇～一一：三〇BC

ヤクの通る道を進み、BCまで歩く。トラバースを終え、川に降り立った瞬間から急に開けた場所になっていた。道は、ヤクが通れるだけあってよい。BC周辺は、ナムチェ周

ギャゾリ　東面

辺の喧騒を離れるのにうってつけの場所である。この氷河は、過去に日本人の氷河研究者が長いことはいっていた場所である。

帰国先発隊は悪天のためルクラに泊まる。

一〇月一八日　ＢＣ八：三〇～一一：三〇ＨＣ

夜、雪が降ったが、朝には止んでいた。くるぶしほどの雪を歩き、ＨＣまで進む。

帰国先発隊はようやく飛行機が飛び、カトマンズに到着する。

一〇月一九日　ＨＣ七：〇〇～一一：三〇コル一二：四〇～一六：一〇ＨＣ

ＨＣより少し登って、氷河を渡り、コルまで到達する。ギャゾリを実際見てみると、それほど難しい山ではなさそうである。「頑張ったら行けるな。」と思うが、メンバーも体調も登れるような体勢を整えられなかったのは厳然とした事実である。

一〇月二〇日　ＨＣ六：二〇～八：〇〇ＢＣ八：三〇～一〇：三〇尾根上～一一：二〇クムジュン～ナムチェ

行きと違い、直接クムジュンに降りる道を通り、下山する。

田中は日本に帰国。

《下山トレッキング》

一〇月二一日　ルクラ

時折降る雨にもめげず、下山する。

一〇月二二日　カトマンズ

帰りはスムーズに飛行機に乗れ、無事カトマンズに到着。

一〇月二三日

藤竿、荻原は日本に帰国。

一〇月三一日

根岸は日本に帰国。

ネパールニレカ登山隊

渉外における反省

田中　貴

今回のネパールでの海外登山では、シェルパ、ポーターなどの現地のスタッフの手配や、パーミッションの申請代行のエージェントとしてGuide All For Seasons（GAFS）を利用した。私が、一回生の時に御一緒させて頂いた、野生動物研究センター・幸島司郎先生のネパール・ランタン谷氷河調査の時にも同様のエージェントを利用しており、ネパールの中で多数あるエージェントの中から選別する上で、一番信頼性と確実性があると思われたからである。

さて、交渉における最終的な局面で確認を怠ったため、いくつかの失敗がみられた。大きな失敗として、先に帰国する隊員がルクラからカトマンズへの帰途の際、飛行機輸送のエクセスで送った荷物が紛失しかけた事件があった。数日間悪天のため飛行機が飛ばず、空港が混雑しており、人を乗せることを優先したため荷物が送れなくなったのだ。ルクラのロッジ主人がエクセスの分は送ると申し出たのでお願いしたのだが、結局、荷物は送られてこず、紛失するところであった。しかし、その後根岸がギャゾリを終えて、ルクラに帰ってきたときに、宿に残っており発見することができた。

もうひとつ重大な失敗があった。今回の海外登山でお世話になった方々に、お礼の絵葉書をカトマンズから郵送する予定であったのだが、カトマンズ滞在中は郵便局が休業しており、エージェントに切手代を払い、発送の代行を依頼した。帰国してから知ったことだが、この絵葉書は一枚として日本に届いていなかったのである。

契約履行という意識が薄いネパールで、依頼したことがうまくいかないことがでてしまう。上のふたつの失敗においても、電話などで最終確認をしっかりとすることで避けられた可能性が大きい。

会計報告における反省

田中　貴

ネパールにいる間で一番苦労したのは、ポーター代の確定であった。天候の理由等で、ポーターが荷物を運ぶことができず、働かない日にも給料を与えなければならなかった。なかなかポーター代確定ができない中、金銭の工面で苦労した。

また、円からルピーへの換金でも失敗してしまった。エージェントにカトマンズもナムチェも同じレートだと言われたので、それを鵜呑みにしたのだが、ナムチェでの換金レートは悪かった。全額カトマンズで換金すべきだった。

支出

国内支出	渡航費	539,920
	装備費	16,178
	食糧費	17,000
	保険費	36,310
	通信費	81,841
	雑費	1,000
国内支出計		692,249
国外支出	登山料	90,360
	滞在費	222,949
	交通費・輸送費	134,490
	人件費	478,524
	食燃料費	47,994
	装備費	90,945
	通信費	7,542
	雑費	1,680
国外支出計		1,074,484
支出計		1,766,733

会計報告として、右図の資料をのせる。

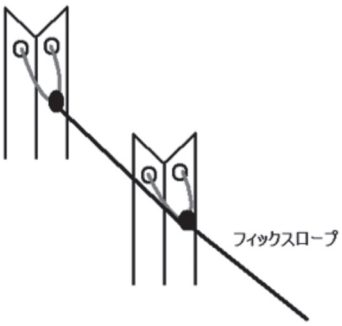
装備における反省

藤竿和彦

登攀具

今回はフィックスロープ二〇〇mとスノーバー一五本、スノーバー用のロープ一五mをフィックス用の装備として用意しました。ニレカの斜面は歩きやすい雪質であり、傾斜も五〇度までのものが多く、難度は高いわけではありませんでした。そのため国内山行で力をつけているならば、確保やフィックスはそこまでいらなかったかもしれません。フィックスロープの長さについては、三〇〇mあるほうが今回については良かったと思いました。また、こうしたことから、スノーバーの適切な本数としては、フィックスロープ三〇〇mに対して二四本必要でした。また、スノーバー用のロープは五〇mほど必要でした。結果として今回用意した量は十分ではありませんでした。

予定ではフィックスロープ一本に対して二本のスノーバーを使うことを考えていました。しかし、フィックスロープ一本に対して四本のスノーバーを原則的に使っていました。スノーバーの設置の仕方はスノーバーにつけているロープが短いために、図の様に設置しました。後方のスノーバーを積極的なバックアップとして用いました。また、横埋めも利用しました。しかし、登山日程の関係もあり、フィックスを用いると予想していた五箇所のうちの三箇所にしかフィックスを張りませんでした。そのためにスノーバーが不足するということはありませんでした。雪質は非常によく、スノーバーを埋めた後に数時間すると非常に硬くしまり、安心感がありました。



しかし、数日おくとスノーバーの周辺がとけて、頭が見えてくるので補強が必要でした。それでも、スノーバーの穴が大きくなっているという感じではありませんでした。今回用いたスノーバーは国内で普段用いているものよりかなり長いものでした。こうした長いスノーバーの方がフィックスには向いているのだと思います。難点としては非常に重く、高所でスノーバーを何本も担ぐのはかなり労力が要るということです。

灯油

灯油は約二〇L購入して、三Lが余った。平均すると〇・三L／人・日となる。しかし、BC滞在中の後半三日間はかなり節約していました。もっと多く買っていた方が余裕があるとともに、買い足す羽目になって余分な費用がかからなくてすみました。ナムチェで買って多めに買って行くほうが結局は安くついたと思いました。

食糧における反省

荻原宏章

一、基本方針

(一) 今回の遠征ではトレッキング中はロッヂで食事をとり、BCでの食事の用意はコックに一任し、こちらで用意するものはHCでの食事のみとした。

(二) HCでの食糧は食べなれている日本食を用意し、一日の目標エネルギー摂取量は三五〇〇kcalとした。

(三) 高所は非常に乾燥しているため、一人一日当たり三〜四Lの水分をとるよう心掛

ける。

二、実際

〈トレッキング〉

ロッヂでの食事は予想よりも高価格で、量は少なかったものの、味は満足のゆくものであった。頻繁にお茶を飲むよう心掛けた。アクエリアスはほとんど消費しなかった。

〈登山期間〉

（一）朝食

ＢＣでの朝食はトーストやお粥、卵料理、スープと、味、量ともに十分なものであった。特に不満は出なかったが、具を増したほうが良かった。

（二）夕食

ＢＣの夕食はロッヂのものよりもおいしく、量も豊富でお腹いっぱい食べることができた。ＨＣでは食べやすいジフィーズの丼物とアルファ米を用意した。これは高所でも食べやすく、好評であった。

（三）行動食・飲料

行動食はネパールで買ったビスケット、チョコレート等のおかし、ゆで卵、チーズなどで構成した。味がいまいちであったためか、消費は多くなかった。

医療における反省

荻原宏章

一、基本方針

松林公蔵部長のご指導の下、以下のことを基本方針として定めた。

（一）高山病に関しては、予防に努め、対処としては投薬よりも下降を第一とする。

（二）破傷風、Ａ型肝炎の予防接種を受ける。

（三）高所順応中も含めて水分摂取を十分に行う。

（四）登山健康チェック表を毎日つける。SPO_2(血中酸素濃度)、血圧、脈を毎日測る。

二、実際

（一）トレッキング期間

トレッキング中は、約二〇〇〇ｍ高度を上げるので、かなりゆっくりと日程を組み、高度順化を行った。また、頻繁にお茶を飲むよう心掛け、ダイアモックスも体調に不安があるときに飲み、使用を控えた。ナムチェで荻原が三九度近い熱をだし倒れたが、高度のためというより、疲れからくるものであった。ＰＬ顆粒、ロキソニンを服用し、五日ほどで回復した。体温計が無かったため、ナムチェで購入したが、始めから持ってくるべきであった。

（二）登山期間

ＢＣ入りし、ＨＣ設営を行った日から、深刻な体調不良を訴える隊員が出始めた。SPO_2の値が五〇〜六〇台の隊員も出始め、ダイアモックス、頭痛のためにロキソニンを投薬した。特に行動後、及びその翌日に不調が出、レスト日を増やして対処した。不調を訴える隊員は食事がかなり細くなっていた。第一次アタックにおいて、ＨＣでの田中隊員の安静時脈拍数が一二〇を超え、本人も不調を訴えたため、全員で下山し、田中隊員は隊長が付き添い、四七〇〇ｍ地点まで下降した。田中隊員は一晩休息し、かなり回復したが、アタックは控えた。隊長の体調も回復しており、多少でも高度を下げて休息するのはかなり有効であるのが分かった。登山健康手帳は毎日つけ、記録の追跡、体調把握にはかなり便利であったが、行動可能を決める明確な基準を欠き、有効に活用することができなかった。ある程度、基準を定めるべきであった。ＢＣでも水分補給に気を付けたが、アクエリアスはその味の濃さからきわめて不評であった。

終わりに

根岸哲生

今回の登山は、パイオニアを夢見て、標榜し、実践してきたＡＡＣＫや山岳部ＯＢの方々にとって、戸惑いを覚える、素直に応援しにくい隊であったと思われる。しかしながら、そうした中であっても多くの支援をいただいた。ありがとうございました。

藤竿和彦　感想文

ヒマラヤは日本とは違う。思い返すと別世界だという感想が一番に出てきます。奇妙な形の植物に出合うことも多ければ、村の中にあるクンブ独特の雰囲気を感じることもありました。そして、目的のニレカ登山は薄い空

気の中を登り、氷河の特徴的な地形と雪質のなかを歩くのは日本ではできない経験でした。海外の活動はおもしろいと感じました。今回の海外登山で日本にはない面白さが海外のどこかにあるのだということを、身をもって確認できました。海外の山に登れて良かったです。

根岸哲生　感想文

はじめて登ったヒマラヤは、とても大きかった。見渡す限りの山は、とても大きく、人を寄せ付けない厳しさに溢れていた。無理して困難な場所を登っているようにみえる日本の山とは違っていた。それと同時に、本当にちっぽけな自分も感じた。ヒマラヤに登るには、さまざまな面で総合力を必要とされるのに、なかなか追いついていなかった。今後、この大きい山を登れるように、心に刻んで、しっかりと登っていきたい。

荻原宏章　感想文

計画が持ち上がったのは遠征の一年近くも前だった。初めにあったのは素直な興奮だった。「ヒマラヤ」などという言葉は日常とは離れた、何か別の世界の話に聞こえた。それは山をやる人にとっても、やらない人のとってもそうだろう。ましてや、そこで山に登るなんてことは考えたこともなかったが、そういうことをやってみたいという憧れはあった。一回生ではあったが、ここぞとばかりに参加した。それからネパールに行くメンバーで、積雪の八ヶ岳や穂高で合宿を組み、練習を重ねた。正直、合宿のほうが遠征そのものより辛かったくらいだ。ただ、登れた、というその一点で甲斐はあったのだ。一年という準備期間の間、パーティー会議を幾度も重ね、隊員はみな、何かしらを捧げてやってきたように思う。それが形になった、一つ達成した。山をやるうえで、これ以上のことはないのだと思う。

田中　貴　感想文

今回の海外登山、私はピークには登ることができなかった。しかし、ピークに登るだけが山登りというわけではなく、他の準備、トレッキング、そして下山後での活動なども含めて登山と思わされてしまうのが海外登山の面白味だったと思う。ヒマラヤでしか、見ることができない動植物や様々な民族、文化である。しかし博物学や民族学に精通しているわけではないので、殊に、そこに住み生活する人との出会いは大変面白いものであり、色々な話をすることができたのは大変貴重な経験をしたと思う。

追悼　廣瀬幸治氏

エトさん・廣瀬幸治君の思い出

中島道郎

エトさんと私は、新制京都大学第一期生・一九四九（昭和二四）年七月入学組の、いわゆる『同期の桜』同士である。しかし、京大山岳部入部の観点から言うと、少々ヤヤこしい。と、言うのは、新制京大発足当時の吉田キャンパスは、旧制三高の校舎をそのまま使用することになったのだが、其処にはまだ、三高・昭和二二年入学組が翌二五年三月まで居座っていたので、旧制三高山岳部の部室もそのまま存続していて、翌年京大山岳部に入ってくる旧制の山口克君などはそちらの部室に出入りしていて、結局、その山口君や故樋口明生君・故兼松雄象君らと共に、廣瀬君が正式に京大山岳部に入ってきたのは、翌一九五〇年四月になってからのことだったように記憶する。

一九四九年という年は、日本の敗戦によって、学制がそれまでのドイツ式（旧制）からアメリカ式（新制）へ切り替えられた年で、非常な混乱があった。そして、敗戦・窮乏時代とて、山に行くにも、食料も装備も不自由な時代であったから、山岳部らしい組織を持った新制高校は無く、従って、その殆どが辛うじて旧制高校で一年間の山岳部経験をしてきていた四九年入学組の連中と、新制高校から登山経験を持たずに入ってきた五〇年入部組の連中との実力の差は歴然たるものがあり、二年生になった四九年入学組はいきなりパーティーリーダーかサブリーダーとして『新人』を指導する立場に立たされた。という訳で、廣瀬君も私も、私的山行はそれ

ぞれが誰かを引き連れて行く立場になったため、二人が一つのパーティーを組んで山に行くということは、彼との長い付き合いの中で、ほんの一回だけであった。それは、一九五一年五月二～五日、二人だけで登った木曾御嶽である。京大山岳部『報告一九五二―一九五三』五六頁に『雑録』として、次のようなその山行のメモが残されている。

○木曾御嶽：五・二～五・五、中島（L）　廣瀬

五・二：残雪の頃の山では、小坂から御嶽へ行くのが安上がりである。山腹につけられた道を若葉のかなたに白く輝く稜線を望みながら行けば四合目辺りから残雪が出てくる。シャクナゲ沢を越える頃、夏道は雪に埋もれ、方向を失わずに行くのになかなか勘が要る。

飛騨小坂○三三二―落合―一合目一〇一〇―濁河温泉一七〇〇

五・三：アイゼンをはいて出発。全然もぐらぬ。タンネ・ツガ・シラビソの林相が美しい。八合目付近で森林限界を抜ける。摩利支天の頂上を越し昼食。荷物を置き剱ヶ峰へ向かう。下りは調子に乗って北に寄り過ぎ、別の道から仙人滝の所で河を飛び越えて小屋に帰る。

出発○六三〇―飛騨頂上○九〇〇―摩利支天―二の池―剱ヶ峰一〇五五―濁河温泉一四一〇

五・四　雨

五・五　倉の平苗場、落合を経て小坂駅

このメモを頼りに、六〇年昔の山行を思い出してみよう。

この時間記録で見ると、夜行列車に乗り、高山線・飛騨小坂で下車している。夜の明けるのを待たずに歩きだす。落合まではバスの便があった筈だが、経費節約のため、往復とも歩いた。菜の花が満開だった。落合を過ぎると山道になる。途中で小学校の遠足の群れに追いつき追い越した。上記時間記録で、往路は一合目と記載しているのに、復路は倉の平苗場としている理由が思い出せない。多分、同じ地点であると言いたかったように思われる。苗場というのは、このあたりは、戦前は皇室御料林、戦後は国有林として、当時はスギやヒノキの植林が盛んであったから、そのための苗木の育成が大々的に行なわれていたのである。広大な苗場には作業員用の小屋が並んでいて、丁度昼飯時で、身かきニシンを焼く匂いが辺り一面に、旨そうに漂っていたことをハッキリと記憶している。

五月山行が素晴らしいのは、山の景色が季節のタイムトンネルを逆行するからである。すなわち、麓ではヤマザクラが既に葉桜になっているのに、山を登るに連れて、落花盛ん→満開→三分咲き→蕾となり、更に登ると芽吹き前、すなわち、春から冬に逆戻りしてゆく様が半日の時間経過のうちに再現する。下山時は、それが順当に冬から春にかけて移り変わるのが半日で再現される。空はあくまでも青く、ヤマザクラは今丁度満開、今夜は濁河泊りで急ぐ必要は全くない。ゆっくりと、この、季節の逆行を楽しみながら登った。

現在は知らず、当時の濁河温泉は、宿泊客が何百人と来ても、ビクともしないのではないかと思われるほどの、一軒の巨大な『小屋』であった。それが、畳・建具は全部片付けられて、柱と床だけの、風が吹き抜けて行くだだっ広い空間になっていて、今の言葉で言うと『パビリオン』状態であった、というとご想像頂けるであろうか。ま、屋根があるだけ野宿するよりはましか、というような状態であった。今なら五月のゴールデンウイークと呼ばれ、観光地は稼ぎ時である五月初旬だが、昭和二六年当時は天皇誕生日があるだけで、誰も山には登って来ず、泊り客は我々二人だけだった。

翌三日は快晴だった。硬い雪面を、キシキシとアイゼンを効かせて登るのは快適であった。御嶽は富士山程の傾斜は無く、歩いて楽々と頂上に着く。ところが、御嶽は巨大なお山であって、頂上に着いても、其処からさらに平らな道が遥けく続いていて、何処が最高地点なのか見当がつかない。約二時間歩いて剱ヶ峰の三角点に至り、万歳して下山にかかった。ところが、御嶽のようにペラリとした山を下るのは難しい。道は雪の下なので、勘に頼って下るしかない。上でほんの少しでも方向を狂わせると、下がるに連れて末広がりに正しい地点から離れて行く。気が付いた時は、温泉から沢の反対岸に立っていた。しかしとにかく、とんでもない地点にまで降りていた訳でなかったので、無事温泉宿に帰り着いた。記録には一四一〇とある。日暮れまでにはまだ時間があるので、温泉に入ることにした。当時の泉源は、宿から三〇〇mほど

上流の崖の途中から湧き出ていて、それを小屋まで水路で導いているのであるが、その水路は完全に壊れていて、湯は宿の浴室迄は来ていない。そこで泉源まで遡ってみた。水路建設は不可能だが、泉源近くの河原の砂を掘ればイケル！と見当を付け、素っ裸になり、素手で砂と小石を掬って池を掘り、そこに湯と谷川の水を引き入れて個人専用の浴槽を作った。湯‐水混合率をいろいろに変えて丁度いい具合に調節した。「自分で作った、自分一人の為の、世界で唯一の温泉！」これほど気持ちの良い温泉に入ったことは、それ以降六〇年の人生で、二度と再び巡りあってない。

廣瀬君と二人だけで山に入ったのは、後にも先にも、この時一回きりではあったが、しかしその唯一の山行は、実に珠玉のような貴重な体験であり、大事な思い出である。

廣瀬エトに贈る

藤田シャクより

六十年前、昭和二十五年春四月から我々の三年間の京大山岳部生活は始まった。

当時。太平洋戦争に敗れた日本は未だ貧しく、日本人も皆貧しく、京大生も大方は貧しかった。

不思議なことに我々の思い出は、酒を飲み且つ酔い且つ歌い且つ踊り遂にはハダカ踊りに至ったことばかりが鮮明である。我々の青春の追憶の為〝雪よ岩よ〟の前かあとに、かならず放歌高吟した三高、四高、五高、六高の寮歌を記しておこう。

三　高

くれない燃ゆる　丘の花
さみどり匂ふ　岸の色
都の春に　うそぶけば
月こそかかれ　吉田山

緑の夏の　芝露に
残れる星を　仰ぐとき
希望は高く　溢れつつ
我等が胸に　湧きかえる

千載秋の　水清く
銀漢空に　冴ゆるとき
通える夢は　崑崙の
高嶺の彼方　ゴビの原

ラインの城や　アルペンの
谷間の氷雨　なだれ雪
夕べは辿る　北溟の
陽のかげ暗き　冬の波

四　高

北の都に　秋たけて
吾等はたちの　夢かぞふ
男おみなの　棲む国に
二八にかえる　すべもなし

そのすべなきを　謎ならで
盃捨てて　歎かむや
酔へるこころの　われわかし
吾とこしへに　みどりなる

髪はみどりの　青年が
なさけの園に　つちかいし
いや生い繁る　友垣や
三年の春と　めぐるかな

五　高

武夫原頭に　草萌えて
花の香あまく　夢に入り
龍田の山に　秋逝いて
雁が音遠き　月影に
高く聳える　三寮の
歴史やうつる　十四年

それ西海の　一聖地
濁世の波を　とわにせき
健児が胸に　青春の
意気や溢るる　五高魂（こん）
その剛健の　質なりて
玲瓏てらす　人の道

六　高　―北進歌―

操陵のもと　春逝かば
遊楽の宴　かげ失せて
征馬鞭打ち　南海の
ますらを北に　進むなり

精進の血に　くれないの
旌旗は野辺に　あふれたり
いでや忍苦の　一年を

行きてトめん　叡山下

戦雲深く　洛陽の
岸に乱るや　潮して
都に寄する　ますらをが
血もて染めなん　吉田山

廣瀬よ。エトよ。
あとそれ程　永くはないわい。
今度逢ったら、天国ビールで乾杯し、大いに飲んで歌って踊ろうではないか。
YやQも　一緒に歌えるかも知れん。
しばらく　待って居てくれ。
　冥福を祈りて　　合掌

（追記）三高（エト）、四高（エロQ）、五高（Y）、六高（シャク）は夫々の母校（旧制高校）である。

廣瀬幸治さんの思い出

井上　潤

うんざりするほど雨が続いた一九五一年夏の穂高涸沢合宿のあと、廣瀬エト（L）、樋口ジャン（SL）、泉ポテシャンと私は飛騨側の双六谷へ入った。水かさを増した谷の遡行に数日を費やし、中の俣の稜線を超えて黒部五郎のカールにテントを張ったその夜、この世とは思えぬ満天の星の輝きを見て圧倒され感激したことを今も鮮やかに思い出す。廣瀬エトさんとの山行を想うとき先ず心に浮かぶ風景である。

五〇年後の二〇〇一年夏には斎藤Yさんに誘われて、彼と私もスイスアルプス登山に出掛けた。マッターホルンは異常な降雪のため登山禁止となり登頂は果たせなかったが、周辺の山数座を共に登ったり、マッターホルン北壁を眼前にした丘では咲き誇る高山植物に埋もれ、二人で終日を過ごした。年をとってもスマートな彼には、スイスアルプス山行がよく似合っていたように思う。いまは亡き廣瀬幸治さんの貴重な思い出である。

毎年彼の年賀状には山や高原のスケッチがあり、楽しみにしていたが今年はもう来なかった。心に残る山友達を失い残念である。ご冥福をお祈りする。

ダッハスタインの絵

寺本　巌

廣瀬ら新制大学一期生とわれわれ二期生とでは、学年はもちろん、京大山岳部入部も一年しか違わない。しかし、一九五〇年大挙して入部したわれわれ新人部員にとって、彼らはまるで幼い子供から見上げる大人のような存在として映った。岩登りはおろか、スキーも未経験者が大半だったから、山登りの指導を受けるのには何の抵抗もなかったものの、彼らの大人びた言動に今で言うカルチャーショックを受けたのは私だけではなかったろう。

彼らは、一年間だけとは言え旧制高校とその山岳部を経験して来ている。実存主義を語り、ロシア民謡を歌い、寮歌をがなり立て、怪しげなドイツ語を振り回す彼らの中心にいつも廣瀬がいた。とてもたった一年違いの上級生とは思えなかった。本を読み、絵を描き、熱弁を振るうディレッタント振りに私は秘かに畏敬の念を抱いていた。「わからんことがあったら何でも俺に訊け。知らんことでも答えてやる。」と豪語してはばからないこの兄貴を、いつか困らせてやろうと思っていた。

ある時、「山の上は太陽に近いのになぜ寒いのですか？」と質問した。思いもよらぬ質問で不意をつかれたのだろう、直ぐには答えが出て来なかった。「くだらんことを聞くヤツやなあ、あとでわかるように説明してやる」と、一週間が過ぎてから答えを貰った。紙に得意の絵を描きながら、ちゃんとした日本語があるのに「Adiabatic Expansion」などとわざわざ難しい学術用語を使って長々と説明してくれた。本当に負けず嫌いのペダンチズムを見る思いで、ますますこの兄貴が好きになったものである。しかしこの質問以来、「寺本は小賢しい屁理屈屋だ」と、大げさに言えば一目置いてみてくれるようになったようである。

私の邪推かも知れないが、彼に頼まれて書き上げた原稿を大した説明もなくボツにしたのは、その負けず嫌いのなせる結果だと思っている。廣瀬が三高の先輩でもある梅棹忠夫さんが主宰するローマ字研究会の会誌の編集をやっていたことはよく知られているが、原稿が集まらなくてと常にこぼしていた。そん

な話題のある時、「ローマ字は、日本語を滅ぼす」という意味のことを言ったら、それを書いて寄稿しろと言われたのである。大梅棹先生が読まれるに違いないからと、緊張して書き上げたつもりである。題名もトーンダウンして、「ローマ字に思う」とした。しかし、原稿は冷たく送り返されてきた。廣瀬編集長によれば、「こんなテーマは百も議論済みである」と言うことだった。しかし原稿を引き受ける前に大要は話してあったし、原稿の書き出しではおそるおそる次のように断ってある。

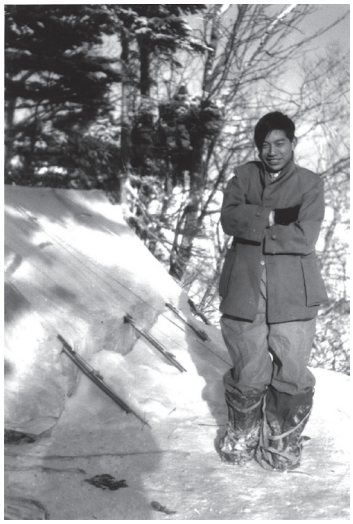
「ローマ字研究会ではすでに議論が終わっているテーマかも知れないがと危惧しながら、世に言うＩＴ時代におけるローマ字の立場について考えてみたい。」

後日、ボツになった原稿を読んで貰った何人かからおもしろいと評して貰えたので、一層廣瀬の決定に納得がいかなかった。しかし、不満はなかった。逆説的かも知れないが、私の小賢しい屁理屈を高く評価してくれた彼の負けず嫌いが出した結論ではなかったかと思うからである。

一九六四年から六五年にかけて、オランダのフィリップス研究所に勤務したが、その時廣瀬一家はドイツのデュッセルドルフに滞在しておられた。オランダの南のアイントホーヘンから、ベルギーをまたいで近かったので、オンボロ・フォルクスワーゲンを駆ってたびたびお邪魔した。優しくて美しい奥様がご馳走して下さった天丼は、オランダの貧しい下宿生活の身にはまさに五臓六腑に沁みわたる美味しさだった。

冬休みには、オーストリーへスキーに出かけた。その後、南下してイタリーはベニス・ミラノ・アオスタと行き当たりばったりのドライブ旅行を楽しんだ。更にグラン・サン・ベルナール・トンネルを抜けて北上、スイスに入りツェルマットへ。マッターホルンを背にスキーを楽しんだ。

夏休みには、廣瀬ファミリーと南ドイツのリゾート、オーバーバイエルンでヴァカンス



知床 C1

知床 C2　廣瀬、斎藤、山口

Dachstein 1964
登山中に知り合ったドイツ人

2010 年　三高 OB 美術展に出品された
「ダッハスタイン」の絵

を楽しんだ。かわいい盛りの三歳児道夫君のよちよち歩きが、芝の丘陵や青い湖の牧歌的な風景に溶けこんで、まるで絵本のようなと思ったものである。その後、イタリアのドロミテの絶景見物にも足を伸ばした。あとで聞いたことだが、道夫君の弟行夫君は託児所に預けられての旅行だった。とは言うものの、このときの廣瀬は、まるでハネムーンのような本当に幸せそうな顔をしていた。それは、外国生活での内助の功に対する奥様への感謝の気持ちが実現できた満足感だったのだろう。

廣瀬の方から熱心に誘ってくれたのは、オーストリーの名峰ダッハスタイン（二九九五m）登山である。ザルツブルク南東一帯のいくつかの湖と二〇〇〇m級の山々が織り成す美しい自然地域、ザルツカンマーグートの最高峰である。山の北面から氷河が懸垂する見事な風景は、廣瀬画伯の創作意欲を駆り立てる絶好の題材であった。その時のスケッチを基に後日描かれた油絵は、なぜか昨年（二〇一〇年）になって三高OB美術展に出品された。この美術展の案内は、毎年芸術オンチの私にも届いていたので、多少お義理もあったが欠かさず見に行っていた。昨年の案内状には、「君と登ったダッハスタインの絵を出している」と書かれていた。この絵の絵葉書は以前に貰っていたが、実物とは初対面であった。この絵、年末にお線香を上げにお宅にお邪魔したとき、あなたに貰って貰うのが一番でしょうと奥様が用意して下さっていた。二人で登ったダッハスタインが、私にとって何にも代え難い廣瀬兄貴との思い出であることをよくご存じだったのだ。

山岳部現役時代の思い出と言えば、なんと言っても一九五二年の冬の知床遠征であろう。廣瀬パーティの一員として縦走隊を迎える本隊最前線テントのなかで、吹雪の毎日を耐えていた。そのため真っ先に縦走隊を発見、握手する感激を味わうことができた。後半の第二次計画でも、廣瀬リーダーの羅臼岳アタック・パーティに参加し、一二時間を超えるアルバイトの登頂を果たした。私の記憶に間違いがなければ、厳冬期初登頂であった。半世紀後の二〇〇二年一〇月に羅臼町で「厳冬期知床山脈初縦走五十周年記念会」を開いた折り、地元山岳会の方々と羅臼岳に記念登山した。「こんなしんどい山をよくもまあ厳冬期に登ったものだなあ」とは、下山後の廣瀬の感想であった。

「知床」がまた遠ざかった。　合掌。

廣瀬先輩の突然の死を悼む

平井一正

脇坂、山口についで、私が新人のときに山の指導をしてもらった廣瀬（三高では呼び捨てということからいつも呼び捨てにしていた。ここでもそれを踏襲する）が逝った。それも突然の事故で。痛恨の極みである。

思えば長い間お世話になった。私が一九五〇年に入学し、おそるおそる山岳部の部室（当時は図書館の三階にあった）に行ったときに、にこやかにむかえてくれたのが廣瀬であった。四月、金比羅の岩場で初めて岩登りを教えてもらった。五月、山は何も知らなかった私を北山の久多三国山に連れていってくれ、地図の読み方や沢登りのノウハウなど教えてくれた。七月、剣岳合宿の真砂沢出会いで、私は毛布で震えていたのに、彼はグランドシートをかぶっただけで寝ていた。そして一一月、中央アルプスの滑川から宝剣岳、その帰途には名古屋の実家に連れていってもらい、風呂に入れてもらった。よく似ている妹さんにお目にかかった。そのほか、御在所岳藤内壁の岩登り、冬の穂高や冬の知床など、四季にわたり山の厳しさ、楽しさなどを教えてもらった。

一生懸命に私のあだ名を考えて、お前は何も知らん奴だから、オギャーと命名すると宣言し、彼が先頭にたって広めようと努力したが、言いにくいのか立ち消えとなった。当時はひどいあだ名が新人につけられる傾向にあり、私は胸をなでおろした。

惜しくも二八年のAACKアンナプルナ隊には補欠になって参加はかなわなかったが、以後ヒマラヤに熱意を示し、私にも金をためて準備せよとハッパをかけられた。二人で西ネパールにいく計画を立てたこともある。

一九五八年のチョゴリザ隊のときは、勤務の関係か、隊員にならなかったが、一九六〇年のノシャック隊では隊員となった。しかしトラックを長距離運転して過労となり、BCで病気になったのは惜しまれる。私のたびたびのヒマラヤ遠征では、梱包材料を寄贈して

くれたり、何かとサポートしてもらった。ともかく私を新人のときから知っている仲であり、よく可愛がってもらった。

あだ名をエトというが、これは河童はエト（男性器、旧制高校生の隠語としてドイツ語のエトバスetwasを使う）を丸太にひっかけてぶらさがっている、廣瀬は北山で木馬道を踏み外したが、エトを引っかけた河童のようにして転落を免れた、という説、また河童は丸太の上を女性が通ると、生理的な自然により、引っかかりがなくなって落ちる、廣瀬が転落しかけたのは、おそらくこういう原因だ、というような説もあり、エトと名付けられたときいている。山口が命名したときいているが、真偽は不明である。

彼は理学部化学が専門であったが、余技として絵を描く。クロッキーという言葉も彼から教えてもらった。お前も絵をならえと言われたこともある。脇坂や林さんの追悼集などのカットは彼の手になる。また彼は鏡字をすらすらと書く特技をもっていた。

彼は辛口の人物評や書評をする。以前私がニュースレターに伊藤洋平さんの人物抄を載せたときは、こっぴどく叱られた。昨年彼に拙著「わが登山人生」を送ったら、丁寧に手紙をくれ、「一言で言えばこれは名著だ」とお褒めの言葉をいただいた。酷評も覚悟していたが、思わぬ評価であり、嬉しかった。一一月一一日の日付なので、ちょうど亡くなる一週間前であった。直接話出来なかったのが、今も悔やまれてならない。

廣瀬はいつもかっこよく、論理的スマートさをもっていた。彼の言動を顧みると、そこに武士道ならぬ登山道のようなものを一本持っていた感じがする。山岳部の先輩の中でもひときわ彼特有の美学をもっていた。

なぜこんなに早くに逝ったのか。長生きして皆に迷惑をかける前に逝ったとしか思えない。きっと彼の美学がそうさせたのかもしれない。すべての面でいつまでも追いつくことのできない得難い先輩であった。

合掌

廣瀬さんとノシャック遠征隊

酒井敏明

私が二回生になって宇治分校から吉田分校へ変わったとき、山岳部先輩の廣瀬さんは化学の大学院生になっていて、あまり頻繁にルームに顔を見せなくなっていた。その直前の厳冬期知床半島初縦走のものすごかった話を、ワイさん（斎藤惇生）やダンナさん（中島道郎）、ポコ（平井一正）、ショーチャン（寺本巌）、マタサブ（川瀬裕史）など上級生部員から、また、大学院生のアンマ（山口克）やザッカス（脇坂誠）などから絶えず聞かされたのに、同種の話をエトさん（廣瀬幸治）から聞いた記憶はあんまりない。

エトさんは大学院を終えて京都を離れ、住友化学の社員として新居浜をはじめ各地の事業所に勤務された。文学部卒業後あらためて同じ学部の他の専攻に編入学し、その後大学院に進んだ私は上記先輩たちや同僚、そして後輩山岳部員たちとの山登りは続いたが、エトさんと山でごいっしょする機会はほとんどなかった。

そのころなにかの機会にエトさんから聞いてたいへん感心したことがひとつあった。勤め人になってから休日によく自転車を使って山に登ったという。山の麓まで乗って行くという程度にとどまらず、なるだけ上まで自転車に乗る。道が細くなり、ついには踏み跡程度になってもできるだけ高いところまで、さいごはかついで登るのが流儀であるとおっしゃった。この先輩はすこし変わっているという印象が残ったのも無理はない。

ところが一九六〇年になってノシャック遠征隊に加わることになり、長期にわたるお付き合いをすることになった。

全部で六人のうち空路をゆく酒戸弥二郎隊長らシニア組三人とは別に、エトさん、ゴロー（岩坪五郎）と私は、トヨタ製軍用小トラック一台と一トンほどの隊の荷物とともに貨物船に乗ってパキスタンに向かうことになった。五月四日神戸港を離れた飯野海運若島丸は同三一日にカラチ港に到着した。

隊長と吉井良三副隊長はわれわれ船組三人をカラチで出迎えた後、空路アフガニスタン王国首都カーブルに飛ぶ。三人組はトヨタ車と伴走する小型乗用車の二台に分かれ六月一一日カラチ発、ペシャワールから一四日ハイバー峠を越えてアフガニスタンのカーブルに到着した。神戸出発以来四二日目であった。

インダス河下流のタール砂漠を北へ縦断、ラホールからペシャワールまでグレートトランク・ロードを西北へ走る区間はカラチで

雇った運転手がハンドルをにぎり、エトさんが助手席に座った。積みきれなかった荷物と二人の若手隊員は大使館で手配してもらった運転手と彼が運転するチャーター小型車に乗った。ラワルピンディまでのはじめの二日間、とりわけラホールまでの炎熱のタール大砂漠縦断はきびしい試練であった。

二週間有効のパキスタン国通過ヴィザの失効寸前にペシャワールで延長手続きを取る。国境を越えて運転する資格をもつ運転手を探し出せなかったので、ここでついにエトさんがハンドルを握らなければならなくなる。エトさんは運転免許証所持者ではあるが、日本ではダットサンなど小型乗用車しか運転したことはない。軍用のトヨタウェポンキャリアのサイズは車長五・八五m、車幅二・一七m、車高二・三二mであり、重量は二・八トンのごついクルマである。厚いヴェニア板製ワイヤバンドボックスにおさめられた約三〇個の木箱と一〇個ほどのキャンバス袋からなる約一トンの遠征隊荷物はトランシット簡易通関扱いで、施錠されたまま荷台に満載されている。

世に名高いハイバー峠を越えトルハムの国境では出入国手続きとクルマ・荷物の通関があって、私たちは国境通過に必要な書類カルネを準備できなかったことに大きな引け目を感じていた。しかし、エトさんが日本語で書かれた運転免許証を振りかざして「これがわれわれのカルネである」と言い張るばかりであったので、根負けした係官はOKしたのだ。ここはエトさんのパーフォーマンスで切り抜けることになった。

カーブルからジープを雇って駆けつけていた隊員澤田秀穂さんの出迎えを受ける。このあとエト新米運転手はこの隊における首席運転者の座を確固不動のものとすることになった。もっとも、左側通行に慣れ親しんだパキスタンからアフガニスタンに入るや否や、右側通行に変わったので、対向車が現れるたんびに助手席のわれわれは緊張を強いられることになった。

AACKが目標としたのはヒンドゥクシュ山脈第二の高峰ノシャック（七四九二m）の試登とワハーン渓谷の踏査であった。それはこの国北東隅の山岳地帯を占めるバダフシャン州の東部にあり、アラル海に注ぐ大河アムダリアの源流、パンジャ川が流れる東西方向の渓谷（ワハーン通廊）の玄関口に相当する。

バダフシャン州奥深く入った日本人はAACKの隊が最初であろう。はじめカーブルでアフガン人運転手を一人やとい、ワハーンまで運転させる契約を結んだ。コクチャ河に沿う悪路の運転に音をあげたこの都会人間の運転手は州都ファイザバードまで来たところで、文部省派遣のリエゾンオフィサーが厚顔にも隊長に離脱を願い出た機をとらえて、一緒にカーブルへ帰らせてほしいといった。契約違反・職場放棄だといっても仕方がない。結局このあと最後まで、エトさんが運転を引き受けざるを得なくなってしまった。ちなみに、私は京都で一二五ccの原動機付きバイクを愛用していたが普通乗用車を運転する免許はまだもたなかったし、この点岩坪も同様であった。

エトさんはコクチャ河沿いの悪路を運転し、ワハーンの入口イシュカシムまで六人と隊の荷物を、無事運ぶ仕事をやりとげてくれた。

七月一六日全員馬とラバのキャラヴァンを作ってイシュカシムを出発、二日目枝谷カジデー川をさかのぼってノシャック登山のベースキャンプを建設した。一八日に登路偵察が始まり、順次CⅠ、CⅡとキャンプを進めてゆくことになる。しかしBC到着ごろにエトさんは風邪をひき、それがなかなか治らないで調子をくずしてしまう。高所で行動できるのはゴローさんと私の二人になってしまったのだが、幸いにして好天に恵まれ、登攀が特別にむずかしいところもなくて、登頂のめどをつけてわれわれが休憩にBCに下りてきたときに強力なポーランド隊が出現するなどハプニングがあったのだが、エトさんは登山期間の前半は完全に回復することができずに終わり、無念残念の思いをされたのである。

八月一七日夕刻に岩坪と私はノシャック頂上を踏み、下降途中に約七〇〇〇mの雪穴で露営を強いられた。寒さに震えながら明るくなるのを待っていた一晩じゅう、エトさんが二人といっしょにビヴァークをしている幻覚からのがれることができなかった。岩坪に「ゴローさんのそちら側にエトさんがいるやろ」というと、「オシメさんの左にエトさんが座っていると思う」のことばが返ってきたのだ。

クルマの運転に字数をついやしてしまったが、エトさんが絵を上手に描いたことは逸することができない。近年すてきな絵を描いた

年賀状はがきをいただくのがうれしかった。「白山の秋」と題した昨年のものは保存してある。四条通り寺町角のビルの六階にある三高会館に、最後の三高生であったエトさんは近作を飾ってもらっていると聞いていたのだが、迂闊にして見に行く機会を失ってしまった。一九六〇年遠征隊の報告書、朝日新聞社刊行の『ノシャック登頂』には、エトさんが遠征中にものしたスケッチから数点が選ばれて載せてある。

山が終わってから高原の湖シワ湖訪問があり、カーブルへ帰着する前にバーミヤン石窟の二体の大仏参観もあった。帰国に際してクルマと残余の隊荷をカーブルからカラチまで陸送する仕事があり、若手三人が担当した。

九月二九日ラワルピンディでゴローさんと別れ、エトさんと私は往路を逆方向にカラチに向かい一〇月二日到着した。エトさんは同月七日空路故国に向かい、わたしは便船を待ってしばらくカラチに留まった。指折り数えると、五一年前のノシャック遠征隊では一五七日のあいだエトさんとともに過ごしたことになる。

ここではエトさんと呼ばせてもらった廣瀬幸治さんは、多少物知り顔をするが、ややさっぱりしたところがあり、人を小馬鹿にする風が無いではないが、いつまでも強く自己を主張する頑固さはなく、都会的でスマートな愛すべきパースナリティをそなえた先輩であった。

つつしんでご冥福を祈ります。

追憶の廣瀬エトさん

左右田健次

廣瀬幸治さんのニックネームはエトでした。後年、ご本人は山岳部の現役時代にはこのあだ名で呼ばれたことはほとんどなかったのに、とこぼしていました。その真偽は知りませんが、少なくとも私たちが入部した一九五二年頃、エトさんと呼んだことはありませんでした。それが、いつの間にかエトが定着したのです。

オシメさん、谷君、サルタン、ガラッパチ、私などが入学したその一九五二年（昭和二七年）前後には、戦後はまだ、色濃く残っていました。衣食は十分でなく、登山道具も同様でした。一澤のキスリングと地下足袋くらいの装備で、新人は山に行きました。そのころ、京大の教養課程教育は最初の一年間が宇治キャンパス、二年目は旧三高の吉田キャンパスで行われていました。入学式の後、山岳部新入部員募集のビラを見て、西部構内南側にあった山小屋風というか、バラック建ての山岳部ルームに行くと、宇治構内の山岳部ルームに集まるようにと日時を指示されました。宇治キャンパスには、大村益次郎が立案、建築したという旧陸軍最古の火薬庫の建物が密林とクリークの間に点在し、山岳部ルームは昔の守衛小屋が二分された一方にあり、他方は将棋部が使っていました。そのルームに、当時のリーダー、藤田陸奥麿（シャク）さんと廣瀬さんがやってきました。シャクが山岳部の活動について短く話した後、エトさんが、山歴を質しました。私は、奥三河、鈴鹿の山と燕岳に登った旨を答えると、エトさんは、「山岳部は鈴鹿や燕を登山の対象にはせんよ」と、後にはお馴染になった少し鼻のつまったような笑い声をたてました。

その後の山岳部の集まりには、シャク、ダンナ、ワイさん、ザッカス、ポコさん、ショウちゃん、トッキュウさん、キュウさん、カメさん、クメさん、チョウスケさん、マタサブ、ボケさん、オンビキなどが出ていましたが、エトさんの姿を見ることは稀でした。恐らく、理学部化学究室での修士課程の実験に忙しかったからと思います。山岳部やＡＡＣＫの連絡のため、北門の近くにあった生化学研究室の階段教室を廻った奥の実験室を訪れる度に、忙しそうな白衣のエトさんを見ました。時に、研究や実験の内容を説明してくれることもありましたが、基礎知識の乏しかった私には、ほとんど理解できませんでした。一度、真珠の色の研究をしている松井さんという仙人めいた研究者を紹介してくれ、真珠の正体が硬タンパク質であり、タンパク質層の光の干渉により、いろいろな真珠の光沢が出ることを知りました。偶然でしょうが、ＡＡＣＫの後輩、柊君も化学科での学生時代、真珠タンパク質を研究したそうです。理学部生化学研究室で真珠やお茶や稲の病気といった実学的研究をする一方、私が所属した農芸化学科の発酵生理学研究室では、光学活性（キラル）化合物のラセミ化酵素やフラビンの生合成などの基礎研究をしていたのは、京大の

自由というか、いい加減というか、面白い所であったと思います。

私たちの年代の山岳部員がエトさんと山行を共にしたことは、少なかったように思います。昭和三一年前後、すでに、住友化学に移っていたエトさんと穂高から槍、笠、抜戸を経て高山へ出たことがあります。少しは生化学の分かり始めた私に、エトさんは歩きながら、以前の修士論文の研究をやや詳しく話してくれました。通称、弥二さんの酒戸弥二郎さんは三高、京大で今西錦司、桑原武夫、西堀栄三郎さんなどの先輩と同世代であり、かつて平井ポコさんがＡＡＣＫニュースの人物抄に優れた人物描写を載せています。弥二さんは農芸化学科で天然物有機化学を専攻した後、戦後の研究機器の乏しい時代に、宇治の京都府立茶業研究所において、緑茶の呈味成分、テアニンを発見、その構造を決定し、当時、国際的に知られていました。エトさんがその生合成を研究していたことは以前に言葉としては聞いていたのでしょうが、その内容を理解して聞いたのはこの時が初めてでした。テアニンの生合成は、三高で弥二さんと同級であった教授が三高出身のエトさんに与えたテーマであり、教授の建てた不合理な仮説のお蔭で苦労した、と苦笑いしていました。結局、この研究は実ることなく、エトさんは博士課程に進まずに当時の住友化学に入りました。私たちは、高山の街へおりて、エトさんの知人の更に知り合いの開業医のお宅にお邪魔して、大変ご馳走になったことを記憶しています。数年後、偶然、私はテアニンの分解酵素を研究し、抗がん性を発見して、文部省のがん特別科学研究費を交付され、貧乏研究室は大いに潤いました。エトさんは「テアニンの研究者が皆、ＡＡＣＫのメンバーというのは、おもろいな」とまた、鼻をつまらせて苦笑いをしていました。

エトさんを想うと、山の関係でも、研究においても「三高の空気」を感じます。戦後、米国の意向により、教育制度が大きく変わって、新旧が混在した時期、長い伝統を持つ三高山岳部は新制度により消滅が決まっていても、消滅を首肯できない心情がエトさん、山口さんなどを団結させ、少し上の近藤良夫先生などをも三高山岳部ルームに引き付けていたのではないでしょうか。一方では、京大旅行部の流れを横目に見つつ、林一彦さんや伊藤洋平さんなどが京大山岳部を誕生させ、独自の活動を始めていました。この間の状況は、正式には「ヒマラヤへの道」（今西錦司編）に記載されていますし、やや詳しくは、ポコサンがＡＡＣＫニューズレターに述べ、近藤先生、山口さん、そしてエトさん自身が「黄昏―追悼　林一彦」にそれとなく触れています。近藤先生は、立ち寄るのは三高山岳部のルームであり、林さんとは会えば会釈は交わすが、「どちらかというとお互いに煙たい中だった」と表現され、「アンナプルナⅡ峰」遠征の後のヒマラヤへの対応振りから二派ができ、「南朝」、「北朝」と呼んだ、とも書いておられます。その後、近藤先生は林さんと、奥様も交えて、かなり親密な間柄になられましたが、やはり、心理的には少し距離を置かれた様子は、後年、私がご一緒したボストンでの数カ月でも感じられました。その内に、三高、京大という単純な流れでは律しきれない数年の混沌を経て、山岳部、探検部、ＡＡＣＫという組織へ人も心情も流れて行ったといえましょう。学外にいたエトさんは、学内にいる人々よりも、純粋に三高山岳部の空気を残していたのかもしれません。ずっと後年、ＡＡＣＫの進むべき将来の方向についての話会いの集まりで「ＡＡＣＫは今西錦司さんの作ったもので、今後もその精神の上に進むべき」と発言していました。

ポコさんがＡＡＣＫニューズレターの人物抄に伊藤ヨッペイさんを取り上げるのに、エトさんと山口さんが強く反対した心の底には、エトさんが「黄昏」に書いている当時の人々の「考え方のズレ」や「いろいろと曲折」があった経緯が投影していたのか、と思います。その山口さんとエトさんとの激しくて楽しい口喧嘩については、どなたかが記すと思います。三高山岳部の先輩で、ポーラログラフィーの理論的研究者であった鈴木信さんには、敬意を払っており、泉殿町の鈴木さんのお宅に連れて行ってもらったことがありました。ＡＡＣＫの海外遠征の募金活動では、住友関係の企業を中心に力強い支援をしてくれましたし、私の研究室の院生が住友化学への入社を希望した折にも、大きな力添えをしてくれました。しかし、このような時にも、自分の親切をできるだけ外に見せないようにしていたのは、この年代の人に共通する一種の「見え」か、自分自身への「照れ」かも知れ

ません。エトさんは批判精神に富んでおり、山だけでなく、理学部の出身研究室の指導者たちに対しても厳しい評価を口にしていました。しかし、また、その古巣に人一倍の愛着を持ってもいました。このようにエトさんの憎まれ口は、しばしば愛情の裏返しでもあったのです。ある企業のトップであった三高時代の友人は、エトさんが赤字続きの会社の社長になると、いつも数年で黒字経営に変わるのを不思議がっていました。秘訣を尋ねたところ、「社長が全責任を負うから、力いっぱい信じるように進め」とやらせただけ、と答えたと言っていました。「廣瀬は口が悪いが、型破りな、いい男」と評していたその方もエトさんも絵を描くのが好きでした。極楽か地獄で、エトさんと山口さんがどのように辛辣な遣り取りを楽しんでいるか、と想います。その周りで、ザッカスの「アッス、アッス」という声や林さんの低くてややドスのきいた声も聞こえるようです。

嫌みな追悼文

岩坪五郎

先輩の廣瀬幸治（コージと読むとおこる。以下エトさんと書く）さんは、山行のときもおしゃれで、スケッチをよくし、社会的な身分などにとらわれない冷徹な批判・判断能力を自慢していた。AACKの事務局長と副会長をしていた時、困難な事態の処理について、わたしはよく、山口さんとエトさんに相談していた。エトさんのアドバイスはつねに前向きで勇気づけられたけれど、かならず嫌みと自慢が混じっていた。おれはゴローなどとちがって優秀なのだというものである。

それにこたえてなるべく嫌みな皮肉な追悼文を書こうとおもう。

一九六〇年、ヒンヅークシ第二、アフガニスタン最高峰（七四九二米）のノシャック遠征隊の隊員選考が始まった頃、今西錦司さんの質問に、廣瀬さんは就職しているけれどヒマラヤ遠征のために貯金を続けている人だとわたしはこたえた。本人には言っていないけれど、これは効果があったとおもっている。

隊荷の輸送のため、酒戸弥二郎隊長は、トヨタ自動車からWeapon Carrier一台を一〇万円で購入してきた。トヨタが米軍から受注生産した数一〇〇台のための試験車両で、一千キロほどはしっていた。ランドクルーザーより一回り大きく、前部に三人、後部にむかい合って六人、計一五人の席があった。エトさんのもっているのは一〇〇〇cc以下用の軽免許証であったが、これで、カラチからハイバー・パスを越え、カーブルを通ってワハン渓谷の入り口に達し、再びカラチに帰着まで、走行距離は七一〇〇キロに達した。

神戸からカラチまで、この小型トラック、隊荷とともに、エト、オシメ（酒井敏明）、ゴローの三名は飯野海運の貨物船若島丸の便乗者として、二七日間の楽しい船旅を経験した。暇であった。エトさんは一年間だけだが旧制三高山岳部員であったからドイツ語の歌が自慢でいろいろ教えてくれた。〝Der gute Kamerad〟はもとより〝Wir fahren gegen Engelland〟,〝Das ist die Liebe der Matrozen〟,〝So leben wir alle Tage〟、〝Ich ging einmal spazieren〟などなどを形容詞の語尾変化にまで気をつけて教えてくれた。そのうち妙なことに気がついた。彼の口ずさむメロディがときどきスーとあらぬ空間に横滑りするのである。わたしは母親から正規の音痴とはいえないがかなりの音弱であるといわれていた。それで、エトさん、あなたは音痴ですか、と質問したら、フン、そんなものは重要な問題ではないと答えられた。たしかにそののちドイツ人の歌手の歌うのをなんどか聞いたが、メロディもリズムもだいたい同じである。ハーモニィは我々にとってあまりかかわりのない次元である。

カラチから炎熱の砂漠をムルタン、ラワルピンディ、ペシャワールに宿泊し、ハイバーパスから右側通行になってカーブルについた。一人の運転手と二人の便乗者であった。しかし朝、出発してギアーをトップに入れたら、給油か食事に停車するまで、アクセルを踏んでいるだけの運転であった。オシメさんによれば、ペシャワールまでは、パキスタン人の運転手を雇ったというが、わたしの記憶はさだかでない。カーブルから運転手を雇ったけれど、ファイザーバードで帰ってしまい、またエトさんが運転することになった。

このあたりからわがWeapon Carrierがノッキングをするようになってきた。わたしなら自動車工場に持ち込むところだが彼はそれを拒否し、自動車に付属の分厚い英文のマ

第３キャンプとスケッチする廣瀬隊員
（1960 年ポーランド隊の記録映画より）

ニュアルを開き始めた。何百万人の米軍兵士がこれを読んで修理できるのだから、自分にできないはずがない、というのが彼の見解であった。

まずエンジンをかけて排気口に鼻をあてると生ガスのにおいがする。つまりガソリンはきている。オクタン価調整値を最低にする。ディストリビュウターを開いて接触をみる、ファンベルトのあたりに懐中電灯を照らしてタイミングをしらべた。さらにキャブレーターを分解してフィルターを洗浄した。六気筒のプラグを交換した。どれが効いたのか、調子よく走るようになり、わが一等運転士は得意満面であった。わたしが感心するのは、分解したパーツをすべてうまく元に戻せたことである。ナットを一つ紛失しておれば、収拾つかなくなるところであった。

帰途、また調子が悪くなり、ノッキングが始まったが、この問題は、帰途バーミアンで解決した。ここで出会った英国、フランス、ドイツなどからの学生の自動車チームが教えてくれた。〝アイク（アイゼンハウアー米国大統領）の車にニキタ（フルシチョフソ連首相）のガソリンをたいているからだ〟といってサンドペーパーを一枚くれた。みごとな指摘であった。エトさん運転の間、助手席のオシメとゴローは六本のスペア・プラグのカーボンをサンドペーパーで入念に清掃し、エンジンのミスファイアー音に耳をすませる。三ケになると車を止め、二人の助手は跳び下りてボンネットを開け、プラグを交換する。一日三度交換したこともあった。しかし、ハイバー・パスを越えて米帝国主義の領域にはいって給油するや、このトラブルは悪夢から覚めたように消えてしまった。

口には出さないが、この運転はエトさんにかなりの負担をかけたにちがいない。第三キャンプ偵察のころからかれは高熱を発し、とつぜん出現したポーランド隊とのアタック競争に参加することができなくなってしまった。憤懣やるかたないおもいだったであろう。よいことをし、苦労をした人に不幸がおこり、ただ助手席にすわっていた二人の後輩どもが、カーブルで文部大臣にアフガニスタンの英雄としてむかえられたのだから。

あれから数十年がたち定年退職して、三人とも毎日が日曜日となり、二度外国旅行をした。ここでもまたエトさんに腹の立つことがおこった。エトさんは Herr Hirose なのに、あのええ加減な男は Herr Prof. Dr. Goro と呼ばれたのである。

エトさん、あなたには実力があり、有能なことをわたしはじゅうぶんに知っています。しかし世の中には運というわけのわからぬ要素もあることを認めてくださいといって、これを追悼の言葉とします。

OKYAN2010 の報告

（兵庫県西播磨 国見山・赤谷山の山行記録）

潮崎安弘

通称 OKYAN の会の山行報告を毎年続けて久しいが、今年度の山行は昨年十月三〇～三一日兵庫県西播磨の国見山（五八五米）と赤谷山（一二一六米）に登り無事終了した。出発前、西日本に接近し一時は OKYAN 繰り延べかと案じた秋台風は、幸い前夜半に南海上を足早やに通り過ぎたので、当日朝の交通便の遅れも僅かに留まり山行計画の支障にはならなかった。

参加者は例年と同じ二五名、中島ダンナ氏の最長老を始め、関東から清水ムスコ氏、又九州から野村オド氏が遠方からの参加であった。

第一日目の三〇日はＪＲ姫路駅に集合のあと、全員専用バスで中国道山崎インター直ぐ南の「国見の森公園」へ。ここは兵庫県の整

備になるふるさとの森の公園で、最高峰の国見山を中心に森一帯が里山の自然を守りつつ維持されている森林公園である。域内山頂までの登山道は勿論、他に山頂付近の野外広場まではミニモノレールが整備され、北に西播磨の多くの峰々が見渡される他、山崎の街を眼下に周辺の眺望が極めて良い事から、前日の足馴らしに最適であろうと選んだもの。

公園到着後は、高低差三〇〇米、延長一一〇〇米のミニモノレールで上がり、野外広場の緑濃き芝生上で昼食のあと二〇分ほど歩いて山頂に到着。期待通りの山頂展望台からの眺めを楽しんだあと、手入れの行き届いた急斜面の森林内を徒歩約一時間で下り、登山口に帰着。再び出迎えの専用バスで例年の宿、東山温泉フォレストステーションに向かった。

翌三一日は薄日射すまずまずの天気で、朝八時過ぎ前日と同じ専用バスで出発。鳥取へ抜ける国道二九号線を北上、県境に開通した新戸倉トンネルの手前で現在も残る旧道に分岐して、暫く上がると既に閉鎖された旧戸倉トンネルの入り口手前に到着した。車はここで降り、更に九十九折れの林道を歩く事三〇分で県境尾根上の戸倉峠に到着した。この峠は標高八九一米、兵庫県と中国地方との分水嶺上で最も高い峠で、昔はこの因幡街道を通り山陰に抜けようとする人は、全てこの峠越えをしなければならず、戦国時代の警護のポイントでもあったと言う。

峠からは赤谷山山頂を目指して兵庫・鳥取県境の尾根道を登る。取っ付きは急坂だったが暫く登ると尾根筋に出てアップダウン、緩急を繰り返しつつ紅葉には少し早いカエデ・ナラそしてブナの林を登り漸く緩やかな登りとなった所で、今年は全員が揃って山頂到達と思いきや、今日の最後尾をつとめた高村幹事がいない。

何かの理由で下山したかと思い、全員の記念撮影を終えた所で本人が到着。峠で出発準備に手間取ったため少し遅れ、登り口付近でルートを取り違えたよう。かって単独行で有名な加藤文太郎氏が登って感激したというこの山、「文太郎隠し」にあったのだろうか……とは本人の弁。

結局の所、峠からの登りは約一時間半、予め川崎アドバイザー氏による赤谷山解説で期待された山頂からの眺望は、折から出て来た霧に阻まれ楽しむ事は出来なかった。天気予報は午後から雨、又昼食には早い山頂到着だったので、全員の写真再撮影と中島ダンナ氏の掛け声によるヤッホーの叫びだけで下山を開始した。

天気は下り坂、山道も下り坂。歩くピッチは順調に進み、尾根上の一一四三米の小ピークで昼食休憩のあと更に下るうち、峠近くの急坂辺りから予想通りポツポツの雨が始まった。

この雨は登山口で休憩する間に本格的な降りになり、峠から下る旧道最後の歩きは雨具や傘で雨を避けつつ旧戸倉トンネル入り口まで下がったが、約束より早い到着となったので迎えの専用バスは未だ来ない。雨中で待つ事暫しでバスは到着。宿のフォレストステーションへは、きつい降雨中の帰着となった。

帰着後は全員入浴のあと休憩で暫しの懇談。再び専用バスに乗り込みＪＲ姫路駅には一八時の予定よりも少し早目の帰着、解散となった。

終わりに第一日目の夜、宿での懇親会でのお話を少し。

第一は、平井ポコ氏のお目出度き昨年五月の瑞宝中授賞のお祝い報告と本人のスピーチ。次いで川崎アワモリ氏と郁子夫人による宍粟五〇名山完登達成に対するお祝い、最後に酒井オシメ氏のノシャック登頂五〇周年記念スピーチと、現地で縁が出来たポーランド登山隊員との同国内での五〇年振りの再会旅行の顛末報告。なお川崎氏の宍粟五〇名山、酒井氏のポーランド旅行の件は、本誌前号に掲載されているのでそれをご参照願いたい。次いで懇親会恒例、第二部の山や旅行の報告会についての紹介をもう少し。

今年の報告は、寺本ショウチャン氏によるペルーアンデストレッキングと、潮崎幹事の中国新疆シルクロードの車旅行のお話。

寺本ショウチャン氏のお話は、昨年七月ＡＡＣＫ会員の斎藤ワイ、前田ツカサ氏などと一五日の旅程で参られた南米ペルーアンデスのトレッキング紀行。ペルーの首都リマから、同国最高峰のワスカラン峰六七六八米を盟主とするブランカ山群の奥地に分け入り、ウニオン峠四七五〇米の難所も越える大トレッキングの途次に、撮影された周辺の五〇〇〇～六〇〇〇米クラスの峰々の数十枚の写真を、現地で入手された民謡曲をバックに纏められた華麗なＤＶＤショー映写に酔いしれたお話

赤谷山頂で登頂者全員

であった。

潮崎による報告は、昨年六月ＡＡＣＫ会員の松浦コッテ氏等全一三名で編成され、中国新疆ウイグル自治区ウルムチを起点としたタクラマカン沙漠の横断と、その周辺を巡る全長三三〇〇㎞に及ぶ十日間の車旅の紀行。途中パキスタン国境のＫ２（中国名チョゴリ峰）や、中国最西端タジキスタン国境近くのカラクリ湖三八〇〇米からムスターグアタ峰七五三六米の遠望を試みるもいずれも天候不良で失敗に終わったが、車旅の多数の写真を、前話と同じく日本の作曲家、喜多郎によるシルクロードの曲をバックに纏めたＤＶＤショーの映写報告であった。

今年の参加者は、中島ダンナ、井上トッキュー、寺本ショーチャン、平井ポコ、青野オンビキ夫妻、酒井オシメ、左右田ガンコ、新井夫妻、川崎アワモリ夫妻、＊高村デルファー、川嶋オレッチ夫妻、＊潮崎パイマン、高野ゴジラ、上尾、＊井関、原田Ａ、宝田ホーデン、中野、野村オド、清水ムスコ、永田ナマコの各氏。

なお幹事は＊印を付す三氏が担当、又川崎氏にはアドバイザーとして多大なご協力を戴いた。

平成二三年一月一〇日　記

「ノシャック計画成立裏話―近江作の段」谷　泰〈ニュースレター五五号掲載〉をめぐる訂正とお詫び

谷　泰

私は、先回のニュース・レター五五号で「ノシャック計画成立裏話」という文をものしましたが、今回平井一正さんからの指摘によって、そこで記した出来事の時期および事の前後関係が、私の誤った記憶にもとづく思い込みであったことに気づきました。

まず、この訂正のきっかけとなった平井さんの指摘ですが、私は前文で、カカボラジ計画の成立を一九五九年暮れから六〇年初にかけてのこととしています。ところが、平井さんは、梅棹忠夫全集に掲載されているカカボラジ計画の趣意書の作成年次が一九六一年一月であることから、当計画の立案が、一年後の一九六〇年の暮れから、六一年の初頭のことではないかと指摘してしてくれました。印刷された趣意書をもとにした指摘であるだけに、これはゆるぎない事実でしょう。

とすれば、楽友会館の理事会で競合し、近江作において成立したカカボラジ計画によってお釈迦にされた若手計画は、一九六〇年夏、酒井、岩坪によって登頂されることになったあのノシャック計画ではなく、それ以後の一九六〇年秋に提出されたものであることになる。ではこの一九六〇年秋に理事会に提出され、近江作で廃案にされた若手計画とはなにものだったか。すくなくとも、理事会、そしてそれに続く近江作での老たちのバンザーイ、バンザーイという叫びとともにカカボラジ計画が成立し、若手計画が廃案になったために、私の髪の毛が突っ立ったということは、否定しても否定できない出来事経験であるだけに、こういう疑問が生じます。ここで私のうっすらした記憶を呼び覚ましてみるとき、当時、ノシャック登頂後も、懸案のサルトロカンリの登攀許可の可能性が一向に見えてこない。そのために、たしか私が言い出しべになって、あらたにパミールの他の山を登る計画をたてた。それであろうと思いいたることになりました。そしてこのように考えることによって、なぜその理事会に酒井、岩坪が出席してなく、私が若手として出席していたのか。そのためにご両人が、近江作での出来事

など記憶がないというのかも了解されるというものです。

とこういうわけで、私の先に記したニュース・レターでの事実関係について、つぎのような訂正をさせていただきます。

（一）一九五九年秋に理事会に若手計画として提出され、対抗案カカボラジ計画によって廃案になったと記した計画は、一九六〇年夏に成功したノシャック計画ではなく、ノシャック成功以後、若手計画として谷が中心となって提案したパミールの他の山を登ろうとした計画である。そして、それは一九六〇年暮れに計画された。

（二）あたかも一九五九年暮れに理事会で若手計画への対抗案として提案されたと記したカカボラジ計画は、一九五九年ではなく、一九六〇年暮れに提案された。そして一九六一年一月に趣意書作成、ビルマ政府に許可申請がなされるとともに、許可がおりる前に早々に新聞社に公にした。それがために、ビルマ政府の心証を害して、不許可となった。

（三）理事会とそれに続く近江作での、老たちのバンザーイ、バンザーイという叫びとともに、若手計画が廃案にされ、カカボラジ計画が成立したという事実は、確実に起こった事実であるが、それが起こったのは一九五九年の暮れではなく、一九六〇年暮れである。

なお、谷は、一九五九年の秋にはノシャック計画の隊員にされていたのだが、酒戸隊長の、人文科学研究所の助手採用試験を受けよという言によって、隊員を降りたことは間違いなく、この事実に訂正の必要はない。

以上、先回のニュース・レターに書いたような事実の前後関係上の思い違い、もうかなり前に起こしてしまっていたのですが、この思い込み記憶を詳細にチェックすることなく、ニュースレター上で公けにしたことに、きわめて心苦しい思をしており、誤ったことが事実化されないように、ここに訂正の文をものすとともに、先回のニュースレターでの文を読まれた方々に心よりのお詫びをさせていただきます。

日本山岳協会山岳共済会および山岳遭難・捜索保険の案内

事務局　吹田啓一郎

日本山岳協会の山岳共済会および山岳遭難・捜索保険の二〇一一年度の加入方法などの案内です。加入を希望される方は下記の要領で手続きを行ってください。

この山岳遭難・捜索保険は、「日本山岳協会山岳共済会」が契約者となる団体傷害保険です。したがって、この保険を申し込み、被保険者（補償の対象者）となるには、「日本山岳協会山岳共済会」の会員になる必要があります（保険加入と同時に申し込む）。

山岳共済の条件として加入者は山行前に所属山岳会（ＡＡＣＫ）へ登山計画書を提出することが義務づけられていますのでご承知おきください。保険金請求時の手続きに必要となります。

日帰りハイキングなどの軽登山をされる方には、保険料の安い軽登山コースが用意されています。ハイキングといえども高齢の方にはどのような事故に遭遇するとも限りませんので、そのような方には万一に備えてこのコースがお薦めです。詳しくは後の説明をご覧下さい。

山岳共済会の海外保険の加入の有無に拘わらず、海外登山やトレッキングの場合も必ず山行計画書を提出して下さい。また、海外山岳コースの保険に加入すると海外登山での遭難捜索費用等が支払われ、国内・海外両方に加入されていると、加入コースにより両方から保険金が支払われます（詳細は一（五）参照）。

二〇〇九年一二月から、制度の運用に必要な業務は横山宏太郎様、高尾文雄様にご協力をいただいています。以前と担当者が交代していますので、連絡先などの変更にご注意ください。

なお、二〇一一年度は保険料・保険金額に変更がありましたのでご注意ください。

一、山岳遭難・捜索保険の種類

国内山行を対象に、山岳登攀コースと軽登山コースの二つのコースが用意されています。

山岳登攀コースには八種類、軽登山コースには二種類のタイプが用意されています。

その中からいずれか一つだけ、希望のコース・タイプを選んで加入します。表に示した、保険料＋年会費の合計支払金額を払い込みます。

表１　山岳登攀コース

2011 年度 級別 A	1S 保険金額	S 保険金額	1B 保険金額	B 保険金額
死亡・後遺障害（千円）	1,000	1,000	1,590	1,590
入院（日額）（円）	1,000		1,000	
手術保険金＊	○		○	
通院（日額）（円）	600		600	
賠償責任（千円）	100,000	100,000	100,000	100,000
遭難捜索費用（千円）	1,000	1,000	1,500	1,500
合計保険料	6,450	3,900	8,260	5,710
山岳共済会年会費	1,000	1,000	1,000	1,000
合計支払金額	7,450	4,900	9,260	6,710

	1C 保険金額	C 保険金額	1E 保険金額	E 保険金額
死亡・後遺障害（千円）	2,350	2,350	5,000	5,000
入院（日額）（円）	1,500		2,500	
手術保険金＊	○		○	
通院（日額）（円）	900		1,500	
賠償責任（千円）	100,000	100,000	100,000	100,000
遭難捜索費用（千円）	2,000	2,000	5,000	5,000
合計保険料	11,540	7,720	23,940	17,570
山岳共済会年会費	1,000	1,000	1,000	1,000
合計支払金額	12,540	8,720	24,940	18,570

＊：手術保険金は、入院保険のついた契約の場合（タイプ名の頭に「1」がついている）、手術の種類に応じ、入院保険金額の 10 倍、20 倍、40 倍の額が支払われます。

表２　軽登山コース

2011 年度 級別 A	Ⅰ 保険金額	Ⅱ 保険金額
死亡・後遺障害（千円）	1,500	2,500
入院（日額）（円）	2,000	4,000
手術保険金＊	○	○
通院（日額）（円）		1,500
賠償責任（千円）	100,000	100,000
救援者費用（千円）	3,000	3,000
合計保険料	2,140	5,470
山岳共済会年会費	1,000	1,000
合計支払金額	3,140	6,470

＊：手術保険金は、手術の種類に応じ、入院保険金額の 10 倍、20 倍、40 倍の額が支払われます。

また、海外での登山やトレッキングを対象にする海外山岳コースは、（五）にあるとおり個別に見積もりをとり、加入します。

（一）山岳登攀コースは表１の八種類です。

（二）軽登山コースは表２の二種類です。初心者でも可能な一般登山道での普通の登山（夏山登山で雪渓を越えるために軽アイゼンを使用した場合も対応する）が対象です。軽登山コースの場合は山岳登攀コースと異なり、疾病が原因となる捜索費用は補償の対象となりません。

（三）山岳登攀コース、軽登山コースのいずれのコースも山行中のみならず、日常生活でのケガも補償の対象になります。

（四）通年の場合、期間は毎年四月一日午前○時から翌年四月一日午後四時までです。

中途加入も受け付けられます。五日までに申し込むと当月一五日午前○時から保険開始となり、二○日までに申し込むと翌月一日午前○時から保険開始となります。保険料は開始月ごとに設定されています。

（五）海外山岳コースは、基本契約タイプの一種類だけです。保険金額は次のとおりです。昨年と同様に、遭難捜索費用には緊急救助ヘリコプター費用も保証されることを確認しています。

死亡・後遺障害　百万円
救援者費用　五百万円
個人賠償責任　一億円

保険料は、対象の山岳、日数により個別に見積もられることになっていますので、海外登山またはトレッキングに行かれる方は、事前に横山様を通じ山行計画を提出して、保険料の見積もりを取得して下さい。

国内と同様に、山岳共済会の会員であることが加入の条件になります。国内の山岳遭難・捜索保険に加入している場合は、表３の通り、一部は海外でも保険対象となります。

海外の保険料は平成二二年一○月一日より値上がりしました。また、七○歳未満と七○歳以上とでは保険料が異なり、七○歳以上の方は救援者費用保険料が高くなっています。

参考までに、過去の保険料の事例を示します。

表3

	海外 トレッキング	海外 山岳登はん		海外 トレッキング	海外 山岳登はん
山岳登はんコース加入者	国内保険 適用分	国内保険 適用分	海外旅行保険 追加ご加入者	海外保険 適用分	海外保険 適用分
死亡・後遺障害	○	○	死亡・後遺障害	○	○
遭難捜索	×	×	救援者費用	○	○
個人賠償	×	×	個人賠償	○	○
入院（加入者のみ）	○	○			
通院（加入者のみ）	○	○			
軽登山コース加入者	国内保険 適用分	国内保険 適用分	海外旅行保険 追加ご加入者	海外保険 適用分	海外保険 適用分
死亡・後遺障害	○	×	死亡・後遺障害	○	○
救援者費用	○	×	救援者費用	○	○
個人賠償	×	×	個人賠償	○	○
入院	○	×			
通院（Ⅱ型のみ）	○	×			
山岳共済会のみのご加入者	国内保険 適用分	国内保険 適用分	海外旅行保険のみ ご加入者	海外保険 適用分	海外保険 適用分
死亡・後遺障害	×	×	死亡・後遺障害	○	○
救援者費用	×	×	救援者費用	○	○
個人賠償	×	×	個人賠償	○	○
入院	×	×			
通院（Ⅱ型のみ）	×	×			

○は海外での保険対象（お支払い事由は国内と同様です）
× は海外での保険対象外

（A）二〇一〇年の阪本公一さんたちのザンスカール（インド・ヒマラヤ）トレッキング、四三日間：一人あたり保険料一六一〇円。
（B）二〇一〇年の谷口朗さんたちのアンナプルナ内院トレッキング、三〇日間：一人あたり保険料一三三〇円。
（C）二〇〇九年の安仁屋政武さんたちのチュルーウエスト（ネパール・ヒマラヤ）登山、三一日間：一人あたり保険料七一〇〇円。
（D）二〇〇八年の阪本公一さんたちのネパール・ヒマラヤ（ロールワリン）ラムドン・ピーク（五九二五m）登山、四〇日間：一人あたり保険料九〇七〇円。

二、加入の手続き

加入を希望する方は、必要事項を明記した加入申込書を、AACKの指定する山岳共済担当者（横山宏太郎様）に提出し、指定の銀行口座に保険料＋年会費を振り込んでください。

（一）加入申込書には次の九項目を記入してください（書式自由、メール本文に記入も可）。

①氏名（フリガナ）
②生年月日（例：昭和二二年五月二一日）、四月一日の満年齢
③郵便番号と住所（フリガナ）
④電話番号、FAX番号
⑤電子メールのアドレス（ある場合）
⑥職業名・職種名
⑦加入コース・タイプ、振り込み金額（保険料＋年会費の合計額）
⑧同種の危険を補償するための他の保険契約があるか
ある場合は、被保険者氏名、保険種類、死亡・後遺障害保険金額、入院保険日額、通院保険日額を記載
⑨過去三ヶ年間にケガで保険金（五万円以上）を請求又は受領したことがあるか
ある場合は、被保険者氏名、保険会社、回数、合計金額を記載

担当者の連絡先は次の通りです。原則として電子メールでお送り下さい。

電子メール：peng-y@amy.hi-ho.ne.jp
FAX：025-524-8216
郵便：〒943-0832
上越市本町2-1-12-801　横山宏太郎

（二）保険料＋年会費の振込口座（申込みと同時に振り込んでください）
銀行：第四銀行稲田支店（ダイシギンコウイナダシテン）店番号514
口座番号：普通預金1241931
名義：AACK山岳保険　横山宏太郎
（エーエーシーケーサンガクホケン

ヨコヤマコウタロウ）

（三）年間を通じての保険加入の募集締め切りは三月二〇日（山岳共済事務センター着）です。従いまして、三月四日までに担当者（横山様）へ申し込みと保険料＋年会費の振込みをしていただければ、四月一日午前〇時から有効となるよう手続きをします。

途中加入も可能で（一（四）参照）、この場合保険料は加入月数に比例して減額されます。詳しくは担当者にお尋ね下さい。

なお、手続き完了の翌月に日本山岳協会から会員証（加入者証）が担当者に送付されてきますので、担当者から本人に転送します。会員証の有無は保険の効力には影響ありません。

三、加入者の山行・登山計画書の提出

加入者は山行時に次のことを守って下さい。

（一）山岳共済の適用を受けるには、日帰りハイキング以外のすべての山行（沢歩き、岩登り、積雪期の登山、及びすべての泊まりがけの山行）で登山計画書を提出する義務があります。

（二）登山計画書には次の事項を記入して下さい。

登山目的、日程、ルート、メンバーの氏名・年齢・住所・電話番号、留守本部、最終下山日、共同及び個人装備、食料（実働・予備日明記）

（三）登山計画書の提出先は高尾様です。できる限りワープロなどで作成したファイルを電子メールに添付して hutte.rv@topaz.ocn.ne.jp へお送り下さい。できない場合は、下記の自宅へ郵送して下さい。入山日の一週間前には提出し、変更があればその都度ご連絡ください。

〒156-0052
東京都世田谷区経堂5-17-15-104
高尾文雄宛（Tel/Fax: 03-3439-9262）

（四）下山後、高尾様へ速やかに電話やメールで下山報告をしてください。

（五）高尾様が担当するのは登山計画書のとりまとめで、留守本部ではありません。留守本部は必ず山行計画者が自己の責任で定めてください。万一の事故発生の時の捜索救援体制も、山行計画者が事前に検討しておくべきことであることをご承知ください。

（六）登山計画書を提出しない方は次年度の加入をお断りします。

（七）山岳共済に関する疑問点や、更に詳しい説明が必要な場合は、担当の横山様にお問い合わせください。原則として電子メールでお願いします。アドレスは peng-y@amy.hi-ho.ne.jp です。

また、日本山岳協会のホームページにも説明があります。ただし、情報の年度にご注意ください。

山岳共済会　http://www.jma-sangaku.org/kyosai/profile/

保険について　http://www.jma-sangaku.org/kyosai/insurance/

お知らせ

企画展「今西錦司　三角点を巡る一五五〇山　登頂の記録」

三月八日（火）～五月八日（日）

九：三〇～一六：三〇

休館日　三月一四、二二、二八　四月四、一一、一八、二五　五月二日

つくば市北郷1、地図と測量の科学館（国土地理院構内）

電話 029-864-1872　http://www.gsi.go.jp

編集後記

戦後誕生した京大山岳部での確執を身をもって知る最後の人、廣瀬幸治氏が亡くなった。お元気であっただけに痛惜この上ない。氏の追悼文を同じ釜の飯を食べた方々に依頼したところ、なんとほとんどの方から原稿をいただいた。氏のお人柄が偲ばれる。

次号は六月初旬の発行予定。原稿締め切りは四月二〇日。

発行日　二〇一一年三月一〇日
発行者　京都大学学士山岳会　会長　上田　豊
発行所　〒六〇六―八五〇一
京都市左京区吉田本町（総合研究二号館四階）
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
竹田晋也　気付
編集人　前田　司
製　作　京都市北区小山西花池町一―八
㈱土倉事務所